

命の普遍性と、 1回きりの個人の人生を尊ぶ



写真／鈴木愛子

小島慶子
「エッセイスト・タレント」

コロナ禍の最中に、2度入院しました。1度目は未明に突然の激しい腹痛と下血に襲われ、自分で救急車を呼びました。到着した救急隊の方がたは、狭い部屋で床に丸まってうんうん唸っている私を手際よく担架に乗せてくれました。運ばれながらオーストラリアで暮らす夫に電話し、「今から〇〇病院に搬送される、生きているから安心して、ではまた後ほど」と報告。夫もさぞ驚いたでしょう。

救急室で激しく嘔吐し、高熱と下血に苦しむ私の背中をさすってくださった看護師さんの手の温もりが忘れられません。調べた結果、幸い重篤な病気ではありませんでした。過労と運動不足が腸に負担をかけたようです。5日間の絶食を経て9日目に退院。絶食期間中は点滴で栄養と水分を補給しているとはいえ、口から飲食できないのは思った以上にこ

たえました。重湯から始めてようやく柔らかいご飯を食べられるようになったとき、本当にうれしくておいしくて、手を合わせて感謝しました。以来、ご飯は柔らかめが好みです。

2度目の入院は、その翌年のこと。突然、体の片側の数カ所に痺れを感じたのです。近所のかかりつけ医を受診したところ「すぐに提携している病院のERで検査を受けるように」と言われ、そのまま紹介状を持って検査入院。5日間にわたって詳しく調べた結果、特に異常は見つからず、退院後のビタミン剤の投与などで痺れは2カ月ほどでなくなりました。いずれもたまたまコロナの波が沈静化していた時期だったため、入院できたようです。

オーストラリアで暮らす息子たちや夫とは遠く8000kmも離れている上に頼れる親族も近くにおらず、入院中はなんとも心細く、不